

**「1:信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。2:昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。3:信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。」**

先日、大井町線の電車に乗っていると、ある釣り広告に目が留まりました。某栄養補助食品の広告にこのように書かれてありました。

「見えないものと戦った年は、見えないものに支えられた一年だと思う」。

その広告を見た時に、今日の聖書の箇所を思い出しました。

目に見えないウイルスに翻弄されたこの一年、いろいろな場面で、目に見えない、いろんなものが見えた一年だったのではないのでしょうか。

オンライン化の波がキリスト教会にも押し寄せてきました。オンライン礼拝がいったいどういうものなのか、オンラインになり、いつでも、自由な時間に礼拝動画を見ることができるようになり、教会に集うことの意味や、同じ時間を共有する意味、ほかの教会の礼拝動画を見ることと自分の教会での礼拝を大切にすることの意味などたくさんの教会が考えるきっかけになったという話を聞きました。

大井教会に連なるわたしたちも、これまであまり意識しなかった礼拝を共にささげること、主の晩餐や、献金など当たり前の毎週、毎月のルーティン化されていた信仰につながる一つ一つを半ば強制的に見直すきっかけになったのではないのでしょうか。わたし自身、この1年、オンライン化の波に飲まれて、なんのために礼拝をするのか、なんのためにここにいるのか、神様の計画はいったいなんなのかを考えるようになりました。福音書のイエスさまを見ていると、質問をされてもかわしてみたり答えてみたり、逆に質問で返したりで、今日の聖書の箇所には、「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」とはっきりと断言されています。算数の方程式のように、白黒はっきりしていることがなんとわかりやすいことかと思わされます。

「信仰」は、名詞ですから、動詞として読み替えるなら「信じて仰ぐ」という言葉ですが、「信じて生きる」ということが信仰の動詞形とも言えるのではないのでしょうか。そしてそれを聖書は「望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認する」ことだと語っています。

望んでいる事柄とは、神さまが望んでいることです。それをわたしたちは知ることとは、旧約聖書のように直接語り掛けられることもありませんから、それを知るには、今聖書からしか聞くことしかできません。教会に集って一緒に聖書を分かち合えないということができなかつたこの1年。神さまの計画と一緒に聖書から聞く場所の教会学校や、祈祷会、各会の交わりがないことがこんなにもみ心を一緒に求められないことにつながるということを実感させられています。

先日から、オリンピック開催に関しても、オリンピックというイベントの裏にある見えないものがたくさんあったことに気づかされました。ニュースでも、「上級国民」という言葉が使われていることを聞きますが、この社会の中にある目に見えない階級、国や政府によって植えつけられた「レッテル」がたくさんあること。その価値観がわたしたちの中にも気がつかない形で植えつけられていること。それは社会の中だけでなく、信仰の面においても、同じように目に見えない価値観の階級、「レッテル」が組み込まれてきているのだらうと思わされます。

そのような目に見えない文化や価値観によって命の順列がつけられる現実の中を生きるわたしたちが、見ることのできない、神様の事実、神様の価値観、神様の命の順列を聖書から聞き、神様の価値観を軸に生きることが信仰の歩みなのかなあと思わされます。

目に見えないものがたくさんある世界の中で、これまでの教会でのルーティンの行事ができない今だからこそ、聖書にある「信仰」と照らし合わせて、これまで大切にしてきたこと、これから大切にしていくこと、教会としての「信仰」の歩み、神様のみ心をともに祈り求めていければいいなあと思います。

これまでの教会活動の一つ一つがともに信仰の歩みを確認しながら行われてきた大切な活動です。今一緒に集まってこの活動ができない中で、でも、一緒に礼拝をささげ、一緒に祈り、一緒に聖書のみ言葉を分かち合いながら、教会を担う働きを神様が備えて下さるのだらうと期待しています。

「見えないものと戦った年は、見えないものに支えられた一年だと思う」。見えないものと戦うということは、福音書を通してイエスさまが戦おうとしていた差別やレッテルに気づき、神様の言葉に従って生きていくこと。そして見えないものに支えられることは、聖書を通して気づかされる神様の愛と導きに引き続き支えられることなののだらうと思っています。

今週1週間も、見えないものと戦い、見えないものに支えられる歩みを共に歩みたいと思います。